

子供組

藩政時代は子供組と呼ばれ、村落の子供が七・八歳から一四・一五歳までの年齢集団であった。年長の子供の指導の下で自発的に行動した。次の年齢集団の若者組への予備段階として子若連中とも云い、左義長や地蔵盆などの年中行事や祭に参加したり主宰した。年長者を「オヤカタ」と呼びその他を「コカタ」と呼んだ。常時活動はしなかつたが左義長・地蔵祭りは子供の一大行事であった。

小正月の一月一五日の左義長では子供組が村内を巡回して藁や竹・まめがら・芝を集め、若連中の助けを借りながら準備したものだ。

八月二四日の地蔵祭りでは村内の片桐家背戸の町川にある「地蔵堂」と専徳寺前の源元家の忠魂碑前などで行って張り合っていた。それぞれ地蔵に供物をし、鉦を鳴らして通行人に喜捨を求めするなど、行事の中心的な役割を果たした。昭和五十年代に無くなっていた地蔵祭りが専徳寺前で復活した時期もあったが平成期には消滅した。

昭和二六年の児童憲章制定を機に子ども会・少年クラブが全国的に発足し始めたが、富山県では昭和五九年頃より各地に誕生した。昭和六二年には富山県児童クラブ連合会も発足した。金戸でも昭和四〇年代より子供組を母体とした子ども会が結成された。

従来の左義長や地蔵祭りの外に、夏休みのラジオ体操は小中学校の校外活動として昭和三〇年代に始まり、金戸の宮で年長の下で続けられた。また映画会などが公民館で行われた。

昭和四三度より学校児童手当が支給されているが、障害保険の必要経費であった。

昭和四九年より専徳寺住職が子共会リーダーとして平成十二年までの二八



年間指導した。その間、寺でのラジオ体操後に正信偈の勤めが始まり、金戸の三・四〇代の人々が正信偈があげられるのは子共会の特訓であろうか。行事として宿泊学習・県外学習・子供報恩講・世代交流ゲートボール・絵画展などが実施された。その間に地蔵祭りや青年会の協力により左義長が復活し、宿泊学習や左義長が現在も続けている。

江ざらえ

平成一九年より春の江ざらえに子ども会が参加して環境美化の活動を始めた。夏休みの美化運動はどの地区でも行っているが、春の江ざらえに子供達が参加して金戸だけである。



平成の子供会

少子化にともない減少する一方であった金戸の児童数も、平成五年に一組に金戸団地が造成されてから増え始め、平成九年の三組セントラルタウン金戸・平成十五年の五組常花タウン金戸造成により、金戸は旧城端では一番多い地区となり、平成二二年度では少中学生は五十名にもなっている。

新興住宅と旧村人の子供達の交流は、金戸に新しい人の輪が増えることになり、忘れ去られていたふるりの新しい発見が次々に見いだされることになった。私たちの固定概念にこだわらない次世代の子供達は、金戸の自然や歴史を全く違うものとして創世していくことである。

宿泊学習で金戸の自然を語り合ったときに、金戸に自然が復活し始めていることを新興住宅の子供達がより実感



しているのを思い知らされた。ある時子供が集落営農の作業場で働く大人に、メダカがいる場所を教えてください。云った時に、村人は「そんなものはないよ」答えたのに対して、「いや、川で泳いでいるのを見たのだから、絶対にいるはずだ」と云ったのであった。村人が農業でいなくなったと思っていた川魚が、すでに戻ってきていたことに気づかなかつたのである。あらためて川を覗いて見れば、シジミがタニシがおり、メダカが泳いでいた。町川や中仙道川には蛍が乱舞している。

親の目より先に子供の目が自然を感知しており、子供達に確実に金戸がふるさとの原風景を体得し、ふるさとづくりを築き始めているのである。

大人達は自然の復活を子供達から教えられたのであれば、その子供達に往古から伝わる金戸の伝承を聞き伝えていくことがあって自然と文化のふる里づくりとなり、新生の金戸気質がつくられることになるであろう。



歴代指導者

人数
小中幼児

- 品川政吉
- 高桑慶信
- 東頭久光
- 山本実
- 松島健一
- 岩城大介
- 山本実
- 片桐聖
- 盛田康史
- 谷村正拓
- 森田真一
- 盛田幸男
- 前田泰弘
- 大浦孝

H	H	H	H	H	H	H	H	H	H	H	S
24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	49
	42	50	53	46	42	41	36	19	35	29	38
		24	20	6	9						